

学科内共通 rubric 評価、事前講評、即時講評を利用した 卒論指導の実践

石川高行*¹・森友令子*¹

Email: ishikawa@oiu.jp, moritomo@oiu.jp

*1: 大阪国際大学グローバルビジネス学部グローバルビジネス学科

◎Key Words rubric 評価, 卒業論文指導, LMS

1. はじめに

卒業論文指導は、学科特性にもよるが、学生の単位取得や就職活動、怠惰癖といった要因によって甘くなりがちな面がある。本学情報デザイン学科では、こういった傾向を避けるために卒業論文指導の実質化・厳格化¹に取り組んできたが、これは同時に、卒論発表に対する教員からの評価が学生にとって不透明に感じられやすい、という点が浮き彫りになった。

これを解決するために、rubric 評価、事前講評、即時講評という仕組みを構築し、2016 年度の卒業論文指導で実践した。以下、その仕組みと学生の利用度合いについて述べる。

2. これまでの卒業論文指導の変遷

2.1 経営情報学科時代

本学開学時から 2007 年度入学生の卒業まで存在していた経営情報学科では、情報系の研究室が集まり、毎年 12 月頃に中間発表会、毎年 2 月頃に最終発表会を実施していた（最終発表会の資料は全て紙で印刷していたため、页数・部数ともに大変な数となり、通常の授業期間が終わるまでは実施困難であった）。

この頃は、表向きは「情報系の研究室の 4 年生は卒論発表が必須」としていたが、出来が良い学生しか発表させない（出来が悪い学生は卒論発表なしで卒業させてしまう）研究室があったり、発表予定学生の無断欠席が目立つ研究室があったりした。

こういった状況下では、卒論にまじめに取り組まない学生ほど楽ができる構造にあり、また、最終発表会が成績締め切りの直前に設定されていたために学生に再発表を求めることも難しかった。中間発表会の直前まで卒業論文が殆ど進んでいない学生も多かった。その結果、卒業論文としてどころか通常授業の report としても要求水準に達していないようなひどい内容のものが少なくなかった。

¹ 卒業論文を学会発表可能な質にまで高めた、という意味ではなく、先行研究の整理や盗用の回避等を確実にした、という意味である。

2.2 情報デザイン学科時代

2008 年度に情報デザイン学科が開設された際に、卒業論文指導の在り方を長時間かけて検討し、次の形で実施することとした。

- 4 年生は、題目発表会（5 月）、中間発表会（7 月）、中間発表会（10 月）、最終発表会（12 月）の 4 回分全て合格しなければならない²。
- 審査は 4 年生を担当する教員全員（のうち発表に来た教員）の合議制とし、3 割程度の教員が「不合格」と判断した場合は発表を不合格とする。
- 発表で不合格となった 4 年生のために何度でも再発表会を開く。（再発表会で合格した場合は当初の発表会で合格したものとみなす。）

この仕組みで最も重要な点は、再発表会が何度でも開かれるという点である。例えば 2016 年度は、発表会と再発表会と合計で 50 回以上開催されている。

再発表会の開催が保証されているため、教員は「不合格」判定によって学生の再発表（研究が不足している部分の補強）を求めやすくなった。学生も、担当教員以外の教員が審査に加わっていることを意識せざるを得ず、結果として専門外の人でも分かるような発表を心掛けるようになった。

3. 「不合格」が出やすくなったことに伴う問題

しかし、こういった状態は、学生にいくつかの困惑をもたらした。

- 担当教員だけではなく、専門外他教員も納得させないといけませんが、発表に於いて学生が焦点を当てたい部分と専門外教員が質問したい部分にずれが生じやすい。
 - 「不合格」評価を受けても、どういう点が不足していたのか、把握しにくい。
- また、以前から抱えている問題もあった。
- 質疑応答が短時間³である上に打ち切り制である（延長できない）ので、十分な議論がしにくい。
 - 留学生は全員が日本語に堪能というわけではなく、

² 例外は、長期入院のために 1 回分の発表が不可能だった学生が 1 人いるのみである。

³ 中間発表会までは 1 人 2 分間、最終発表会では 1 人 5 分間。

会話だけの状態（文字化されていない状態）では質問の理解や後日の振り返りが難しい。

4. rubric 評価と Google Spreadsheets による解決

これらの問題を解決するため、Moodle 上で rubric 評価を学生に提示することとし、また Google Spreadsheets を利用して教員からの講評を文章で読めるようにした。

1 回の発表会の標準的な流れとともに、学生にどのような情報が提示されるかを整理すると、以下の通りとなる。

表 1 発表会の標準的な流れ

発表会数日前	予稿（または résumé）の提出締切 教員の 1 人がとりまとめて PDF 化、Moodle 上で公開 各教員が上記 PDF file を読んで事前講評を Google Spreadsheets へ書き込み（学生は随時閲覧可）
発表会当日朝	発表 file の提出締切（学生は事前講評を読んで発表の焦点を調整できる）
学生の発表中	各教員が学生の発表を聞きながら Google Spreadsheets 上の即時講評に質問・意見を書き込む
発表会直後	各教員が審議開始、可否の他に rubric 評価を確定 学生は可否と rubric 評価を閲覧

ここに出てくる「事前講評」と「即時講評」は別物であるが、形式は同じである（図 1）。「即時講評」は、各学生が発表を開始してから質疑応答に入るまでの間（最終発表会は 7 分間、それ以外は 3 分間）に教員が書き込むものである。発表中でない学生は、発表を聞きながら、即時講評が同時に書き込まれる様子を見ることができるので、他学生の発表に飽きがきにくかったのではないかと推測しているが、この点は検証していない。

rubric 評価の軸は以下の 3 点である（評価は概要）。

- 先行研究の整理（全然/少々/充分）
- 独自性・新規性（期待できない/不充分/期待でき

る）

- 専門性（学科にそぐわない/悪くない/良い）

5. 学生の反応と活用人数

即時講評について、2016 年 5 月時点で学生に調査したところ、有効回答数 16 人で以下の結果が得られた。

表 2 即時講評についての調査結果

大変役立った、次回も実施してほしい	5 人
かなり役立った、次回も実施してほしい	7 人
少しは役に立った、次回も実施してほしい	3 人
少しは役に立ったが、次回以降はなくてもよい	1 人
役に立たなかった、次回以降はなくてもよい	0 人

自由記述では「他の人の発表時にリアルタイムでコメントが読めること、自分の発表の際、質疑応答で意見がなかった場合でも先生方からコメントいただいているのが見えるので便利だと感じました。ただ発表するだけではなく、他の学生の発表とコメントを見ているとどういった所が指摘されるか勉強にもなりますし、いただいたコメントを参考に次の発表などに活かせるので、これからはリアルタイム表示があると嬉しいです。」という回答があった。

即時講評の利用者数（および発表会の参加者数）は回によってばらつきがあるので統計的な解析はしていないが、例えば 2016 年 5 月 17 日は発表者 14 人に対し即時講評閲覧者 25 人、同月 19 日は発表者 6 人に対し即時講評閲覧者 17 人であった。発表者は自分の発表に対する講評が気になるから当然閲覧するものとしても、発表者でもない学生もかなりの人数が閲覧しているということは、仕組みさえできていれば学生は他人の発表にも興味を持つといえるだろう。かつての卒論発表会では、自分の発表時間帯以外は会場を抜け出してなかなか戻ってこない学生が大量にいたり、他人の発表中はずっと居眠りしている学生が多かったことを考えると、他人の卒論やその他様々なことに学生の興味を向けさせるために ICT を利用した工夫の余地がまだまだあることを示唆していると考えてよいのではないだろうか。

番号	姓	名	題目	岡本	韓	稲泉	石川	下條	森友	安達
7	色が与える味覚への効果	スライドがうまくまとめられている						
8	地域ラジオ放送の現状と今後		アンケート対象をより詳しく					
9	動画投稿サイトによるTV 離れへの影響と考察		アンケートの母数は？					
10	発声方法を活用したボイストレーニング	スライドは見や						
11	幼児の可愛いと大人の可愛い	どうやって小仕						

図 1 即時講評の様子